

第26回新潟画像医学研究会

日 時 平成3年11月9日(土)
午後2時より
会 場 新潟大学医学部
大講義室

I. 一 般 演 題

1) 頭蓋骨, 頭蓋内転移を示した悪性胸腺腫の
1例

桑原 悟郎・西原真美子
小田 純一 (新潟大学放射線科)
岡本浩一郎・登木口 進 (新潟大学 歯科)
伊藤 寿介 (放射線科)
中川 忠・田村 享 (新潟大学脳神経)
外科

頭蓋内転移をきたした悪性胸腺腫の一例を報告した。症例は肝転移, 胸膜播種をともなう悪性胸腺腫と診断されている60才の女性で, 初診時より7年後に左片麻痺にて発症した。CT, MRI にて右前頭部に出血を伴う腫瘍が認められ, 手術的に硬膜, 骨に浸潤する脳実質外腫瘍が確認されている。

胸腺腫の転移は1~15%に認められると報告されているが, 頭蓋内転移はきわめて希で現在まで17例の報告が認められるのみである。脳実質への転移, 硬膜転移, 癌性髄膜炎が報告されており, 転移経路としては(1)血行性, (2)胸椎レベルの硬膜へ直接浸潤し, 髄液を介して播種する, の2経路が想定される。

2) 興味ある乳児頭蓋骨腫瘍の1例

小林 勉・外山 孚
川口 正・山本 潔 (長岡赤十字病院)
増田 浩 (脳神経外科)

我々は比較的稀な, 頭蓋骨に発生した aneurysmal bone cyst を経験したので報告する。症例は11ヶ月男児。出生1ヶ月より左頭頂部の腫瘍に気付かれ来院。来院時左頭頂部に5×5cmの固い表面平滑な皮下腫瘍を認め, 頭部 X-P にて soap bubble 様の骨欠損像, CT にて内板の一部欠損を認めた。MRI では, T₁-WI にて hypointense, T₂-WI にて hyper-intense lesion として認められ, Angiography では avascular mass の所見であった。以上より, ABC を疑い, 外科的に切除術施行し, 術中, xanthochromic な液を含む古い血液を認めた。これまでの報告では, 頭部 ABC の乳児発生例はほと

んどなく, MRI 上の所見についても稀といえる。MRI は, 骨病変の描出は不良なものの, 内容物の性状から, 1969年 Dabaska が報告した stage 分類と考えあわせ, 有用な情報を得られるのではないかと考える。今後, そのような報告例が期待され, ABC の病像についてより深い考察がなされると考える。

3) 間歇性眼球突出の1例

田村 彰・小出 章 (厚生連中央総合)
青木 廣市 (病院脳神経外科)

間歇性眼球突出はその原因の90%が静脈瘤であるとされている。私たちは, 最近典型的な一症例を経験したので報告する。

症例は61才女性。2年ほど前から, うつむいた姿勢や腹臥位で右眼に眼球突出が起こることに気づいた。

通常の背臥位での CT で, 眼窩内に特に異常を認めず, 腹臥位の CT で右眼窩外側に mass が出現し眼球突出が起こってくるのがわかった。診断は CT 上, 眼窩内静脈瘤と思われたが, 静脈撮影では静脈瘤を描出することはできなかった。

眼窩内静脈瘤の手術法に関しては, いくつかの報告が見られるが, いずれも術後に視力低下や外眼筋麻痺などの合併症をおこしやすく, 手術例は少ないのが現状である。視力障害や眼痛などのない症例では, 保存的治療を原則としている報告が多い。

4) 頸動脈バルーン閉塞試験における ^{99m}Tc-HM-PAO SPECT による CBF モニタリングの有用性

西巻 啓一・小池 哲雄
竹内 茂和・伊藤 靖 (新潟大学脳研究所)
藤井 幸彦・田中 隆一 (脳神経外科)
佐々木 修・小泉 孝幸 (桑名病院脳神経)
外科

一時的・永久的を問わず頸動脈などの脳主幹動脈閉塞を要する病態は少なくないが, その時の脳血流 (CBF) 低下の評価法には未だ確実なものはない。我々は, 従来よりの Balloon 閉塞試験に, ^{99m}Tc-HM-PAO SPECT による CBF 測定を併用した。対象は大動脈瘤1, 頸部~脳動脈瘤4, 頸部腫瘍2, 頸動脈狭窄1の8例であった。従来通りに, 経大腿動脈的な Balloon catheter による30分間の閉塞試験中神経学的・電気生理学的検査を行い, それに加えて閉塞解除5分前の HM-PAO の静

注による SPECT を行った。従来の検査上は全例で陰性であったが、SPECT 上は3例で CBF の低下を認めた。血管閉塞は、3例に45～90分の一時的遮断を、2例には永久的閉塞を行った。CBF 低下を認めた例では血管吻合術などの補助手段を加え、低下を示さない例ではそのまま閉塞を行った。術後経過は良好であった。HM-PAO SPECT を併用した閉塞試験は従来の検査より鋭敏かつ比較的簡便で有用であった。

5) 下顎部 mucoepidermoid tumor の1例

足利谷美砂・萩原 和夫
林 孝文・佐々木富貴子 (新潟大学歯科)
中村 太保・伊藤 寿介 (放射線科)

今回我々は、下顎部に発現した mucoepidermoid tumor の1例を経験したので報告する。パノラマX線写真上では、右下7番部下顎骨体から下顎枝にかけて、下顎下縁・臼後部に広がる比較的境界明瞭な多胞性透過像が認められた。CT で顎骨外(臼後部～舌側)にも顎骨内から連続して腫瘍が認められ、造影 MRI・T1 強調画像上で、各々の胞内で多彩な intensity を持つ多胞性像を呈した。CT superhigh resolution 骨表示像上では、臼後部での皿状様骨破壊と、顎骨内部への軽度膨隆を伴った compartment の連続形成が認められ、臼後部以外の頬舌側皮質骨にも部分的破壊が見られた。また、顎骨外の腫瘍により、舌側皮質骨は外側から吸収され、その形態は scallop 状を呈していた。組織由来としては、骨の破壊形態や軟組織の顎骨内外での volume の差などから推測して、臼歯腺由来が最も考えられると思われる。

6) 下顎部化骨性線維腫の2例

加藤 徳紀・益子 典子
佐藤 正治・中山 均 (新潟大学歯科)
中村 太保・伊藤 寿介 (放射線科)

化骨性線維腫は骨組織の形成を伴う腫瘍状増殖物である。本疾患は下顎大白歯部に好発すると言われ、透過像と不透過像が混在する像のため、単純写真では臼歯部の陰影と重なって、その病態の把握が困難なことがある。

我々が経験した2例も下顎大白歯部に広範囲に及ぶものであった。

その2例の硬組織・皮質骨を中心にX線学的・病理組織学的に考察した。

① 1症例で、内部に形成される硬組織の石灰化度が低

いため、X線画像では病理像と若干違った像を示した。

② 皮質骨の膨隆の仕方を周囲の筋・皮質骨の厚さから考察し、単純写真では、その病態を知ることが困難なため、CT による検索が必要である。

③ 両症例とも連続する皮質骨を CT 上で認めたが、病的にはかなり異なったものであった。

7) 二重造影法と CT を併用した顎関節軟組織診断について

高瀬 裕志・二宮 秀一 (日本歯科大学新潟
前多 一雄 歯学部放射線科)

顎関節症、特に、顎関節内障では、関節円板などの顎関節軟組織成分の状態を正確に把握することは重要なことである。そのための放射線学的検査としては、従来から、造影検査法が用いられている。当科では、1984年より顎関節二重造影断層撮影法を導入し、顎関節軟組織の病態観察をおこなっている。本法は、各種の顎関節造影検査法の中でも最も詳細に顎関節軟組織の状態を観察できるものであるが、良好な前額断層像を得にくいため、顎関節の外内側方向の観察が難しく、円板の側方転位などを診断する際に支障となる場合がある。この問題を解決するため、最近われわれは、顎関節二重造影断層撮影法と前額断 CT の併用を試みている。今回は、本法の概要を紹介するとともに、その CT 像を供覧した。顎関節二重造影断層撮影法に加えて、前額断 CT を併用することで、顎関節円板の側方転位などをより詳細に観察可能であった。

8) 病理所見と対比した肺高分解能 CT 像の検討

齊藤 徹 (水原郷病院内科)

末期に瀰慢性肺陰影を示した症例の、剖検直前の肺高分解能 CT 所見と伸展固定肺病理所見を対比検討した。症例は急性型間質性肺炎1例、肺癌5例の計6例である。

肺胞隔壁の肥厚は肺野濃度上昇、微細粒状影に、小結節化は小粒状影に描出された。肺胞腔内の癌細胞散布は肺野濃度上昇、及び、斑状影に、肺胞腔内浸出液は肺野濃度上昇として描出された。

癌性リンパ管症による結合組織の肥厚は、臓側胸膜肥厚が葉間胸膜の肥厚として、小葉間隔壁の肥厚が胸膜に垂直に走る線状影として、気管支、脈管周囲結合組織の肥厚が、気管支、脈管影の不整肥厚として CT 上描出